

ちいさき音

ユーセー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バンド。

それはメンバー1人1人の想いが音となって作り上がるもの。

この世にはたくさんのバンドがある。

これはとある少年と、とある小さなガールズバンドのお話。

目次

1話	廃部!?	1
2話	初めての会話	6
3話	心の距離が急接近	12
4話	繋がる輪	19

1話 廃部!?

ドラム、ベースの作るリズム

ギター、キーボードの作るメロディ

そこに乗つかる歌声…

ああ…なんてバンドは素晴らしいんだろう。

俺もこんな風にバンドをやりたい。

こんなにキラキラしててカッコいい…

絶対になりたい!!

「おーい、起きろススムー!」

母さんの起こす声が部屋に届く。もう朝か…

まだ重い体を起こしリビングへ向かう。

「ちよつと起きるの遅くない!?まだ学校始まったばかりなんだから、遅刻とかやめてよね!」

「はいはい…わかったわかった…」

俺の名前は一軸ススム、今年から高校に入った新1年生!

期待と希望を胸に!と言ったところだけ…

俺の通う高校は、同じ中学の奴らばかり。

何の新鮮味もない。

中学が6年あるのと同じようなもんだ…

しかし、1つだけ物凄く楽しみなことがあった。

それは…

「あんた今日から部活でしょ?道具忘れずに持っていきなよ?」

そう、部活だ。

中学の頃も部活動はしていた。

幼い頃に憧れたあのキラキラになるために…と吹奏楽部に所属して音楽を楽しもうとしていた。

だがそれは違った。

俺が求めていたキラキラはそこには無かった。

だから俺は…

「軽音、頑張ってくるよ」

中学卒業前に買った大切なドラムスティックを握り、俺は学校へ向かった。

その日も何ごとも無く授業を受け、放課後になった。

俺は走って軽音部の部室であるスタジオへ向かった。

中学には無かったスタジオ。

だからこそ実現したバンド活動。

俺は胸を躍らせ、そこスタジオの扉を開けた。

「失礼しまーす!!」

俺の目に入った景色、それは…

「…あれ?」

そこに飛び込んできたのは俺も良く知っている…そう、吹奏楽部の練習風景だった。

「君? 新入生かい?? 今は合奏中だから出て行きなさい。新入部員は募集していないんだ」

「え、あ、あの…すいませんでした…」

なぜ? なぜなんだ!?! なぜ吹奏楽部がここぞ!?!

俺が入学前に見学にした時にはここで軽音部は活動していたはず

なのに！

わけのわからなくなった俺は仕方なく職員室に行き、先生達に話を聞くことにした。

「え？いや、初日の説明会の時に言ったよ？ちゃんと聞いてなかった？」

「あれ？そうなんですか？！すいません：ちゃんと聞いてなかったかもしれないです…」

「そういえば初日の説明会で、部活に関する話を話していたかもしれない。」

もう軽音部に入ることしか考えてなかった俺は全く話を聞いていなかった。

「全く…：今度からはそんなことがないようにね？我が校は今年から吹奏楽部に力を入れることになったの。だからそのために音楽室ではなくスタジオを使うことになって、スタジオを日替わりで使っていた部活：軽音と演劇ね、この2つは部員も少ないことから廃部にされたの」

「そ、そんな…：なんでこんな大事なことを聞いていなかったんだ…」

「いや、それ以上に俺はこれからどうすればいい!？」

俺のキラキラカッコいいバンドマンへの道のりはここで途絶えるのか!？」

先生からそんな話を聞いた俺はその日は何もやる気が起きず、家に帰ることにした。

帰り道、先ほどのショックを紛らわせるために中学の頃から通っているパン屋「山吹ベーカリー」に寄った。

なぜ通ってるか？実は同じ常連さんに可愛い女の子がいるのだ！
ぶっちゃけその子を見たいから！なんて気持ちも少しあつたりす
る。

いつも俺が買うのはチョココロネ。

その子がいつも買ってるのを見て、いつか話す時に話題にしやすい
ようにだ。

まあ、そんな下心満載な理由で買い始めたのだけれども今となって
はこのパン屋のトリコである。

もう高校生だし、そろそろ話しかけちゃおうかな…

いやでも相手は女性だし…恥ずかしいな…

実は女性と話すのがめちやくちや苦手なチキン野郎なのだ…

そんな葛藤を繰り広げながらも、パン屋に着いた。

お、いたいた！今日もやっぱりあの子がいた！

先ほどまでのシヨックはどこに行つたのか…

急に胸がドキドキとしてきた。

いざ…入店！

「いらっしゃいませー！」

あれ？見知らぬ声だ、いつもの人じゃない…

少し気になりレジの方へ目をやると、それはまた可愛い女性が立っ
ていた。

高校も始まったしアルバイトの子かな？

これはもう逆にここに来ない理由がないぜ!!

一時的ではあるかもしれないがシヨックは完全に吹き飛びルンル
ン気分。

あの子の後に並びいつものチョココロネを買って家へと向かうこ
とにした。

「ただいまー」

「おかえりー、部活やるにしては帰りが早かったんじゃない？」

その言葉を聞き、再びあのショックが蘇る…

「あ、それなんだけど…：軽音部、廃部になったっばい…」

「あ、そう、それは残念ね」

淡々と言われた。

とても残念そうな気持ちは伝わってこない。

「結構ショックなのよ…：あんたは随分あつさりしてるね」

「いや、息子とは言い他人事だからね。てかあんたなんでそんな部活にこだわるわけ？」

「は？だってバンドキラキラしててカッコいいし、俺だってあんな風に楽器叩きたいんだよ!!だからこのドラムスティックだって買ったんだ！それに本物のドラムだって叩きたいんだよ!!」

バンドをやりたいという気持ちを馬鹿にされた気がして少しイラついた。

「いや、だから部活にこだわる必要はくない？」

「それってどういうことだよ!？」

「いや、近くにライブスペースあるみたいだし？そこでやったら良いんじゃない？」

「母よ、あんたは神か」

切り替えが早いな、俺。

なんでそんな簡単なことが思いつかなかったんだろう…

早速明日、学校で同志を集めてバンドを組もう!!

俺は晩御飯にチョココロネを食べ、入浴を済まし就寝した。

2話 初めての会話

前日のショックはもう残っていない。

俺は早くバンドがやりたい！

今日は学校でメンバーを見つけて、放課後に練習スタートだ！

朝から気分はルンルンだ。

「ススムー時間大丈夫なのー?」

「大丈夫だよー、すぐ出るわ!」

俺は学校に行き、

トイレ休憩、お昼休憩

あらゆる時間に人を誘いまくった。

しかし、1人も首を縦にふることはなかった。

理由としては楽器代やスタジオ代を考えた時にお金が足りないとのこと。

やっぱり元々興味があつて楽器を持つてる人を誘うしかないか…

いやでもそんな人達は高校生になったらバンド組んでるよな…

先が思いやられるな…

良く良く考えてみたら近くにあるつてだけでどこにライブスペースがあるかも、どこで練習したらいいかもわからないかもしれない…

はあ…本当大変だな…

やっぱりまずは詳しい人を誘うしかないか！
時間をかけて探せばなんとかなるな!!

相変わらず気の変わりようが激しい俺は、
誘って断られ悩んで吹っ切れて…

これを繰り返してかなりの時間が経過した…

そして、ほぼ2週間後の放課後にやっと気が付いた。
今のやり方じゃダメなんだ、このままじゃ時間を無駄にするだけなんだと…

その日はずっと悩みっぱなしだった。
解決策を見つけれない、そんな自分にイライラしていた。

「ああー、もうダメだ。わけわかんねえや…バンド組むだけでこんなに大変だなんて…。腹減ったな…今日もチョココロネ大好きなあの可愛子ちゃんを見て癒されてこよう…」
俺は毎日通っている山吹ベーカリーへと向かった。

「いらっしやいませ〜」

レジにはおそらくバイトであろう、もう1人の可愛い子がいつも通り立っていた。

だが…

(あれ？チョココロネちゃんは?)

今日はいつもチョココロネを買いに来てるあの子がいなかった。

「また今日も来てくれたんですね！毎日ありがとうございますー！」
レジの子が話しかけてくれた。

さすがに毎日通ってるから、認識されてるみたいだ。

「あ、ああ…その…どうも…」

やっぱり可愛い子と話すのは緊張するな…。

「えっと…その制服ってこの辺の高校のですね？何年生なんですか？」

「あつ…1年生です」

「同じ年なんだ〜！じゃあお互いタメ口で話そ！私は山吹沙綾。あなたは？」

山吹!?それってこの娘ってこと!?

「山吹…?」

「そうそう、ここの家の長女だよ〜」

なるほど…それでこんな早い時期からバイトしてるわけね…

ってそうだ、自己紹介しないと

「えっと…」軸…ススム…です」

うわあああ！何やってるんだ俺！折角話しかけてくれたのになんでこんなに素っ気なく返してるんだ!!

マジでこの沙綾ちゃんって子天使すぎてまともに話すの辛すぎるんだけどおおお！

「イチジク…?面白い名字だね!」

「う、うん…」

「そんなに緊張しなくていいのに!いつも来てくれるし…これからもウチをどうかよろしくお願いします」

「は、はいー!これからもたくさんよろしく!」

もうなんか可愛すぎてテンパって…何言ってるんだ俺って感じだわ…

「いつも買ってくるのはチョココロネばかりだけど…好きなの?」

「う、うん…チョコ好き…」

「なんかそのおどおどした感じも好みも、りみにそっくりだね〜！生き別れた兄妹だったり…？」

「？りみ？」

「ああー、いつもススム君と一緒に時間帯にチョココロネ買ってる女の子だよ」

へえーあの子りみちゃんって言うんだ…

名前も可愛いんだな…

でももう可愛い子と話したら緊張しすぎて俺死んじゃう…

「きよ、今日は…そのりみちゃんは…？」

って何聞いてんだ俺!?

いきなりちゃん付けしてるし、なんかりみちゃん目的で来てるのバレちゃうんじゃないか!?

「なんか今日はお姉ちゃんのバンドのライブがあるみたいでそれを見に行ってるみたいだよ？」

あ、良かった…怪しまれてない…。

って、ん？それよりも気になるワードが…

「ライブ…どこでやってるの？」

「この近くにSPACEって場所があるんだけど…そこでやってるみたいだよ？」

その名前！聞いたことあるぞ！

よし！そこにりみちゃんを…じゃなくて、バンド仲間を探しに行こう!!

「もしかして…りみのストーリーカー…？」

やっぱり怪しまれてたー!!

「い、いやーそ、そんなことないよ!？」

やばい！動揺してるのバレたかな!?

「冗談で言ったただだから安心して？」

キツすぎる冗談だよ…全く…可愛いなあ…

「あ、あとさ…ススム君…知り合ってたばかりの人にこんなこと言うのもあれなんだけどさ…！っお願い聞いてくれない？」

「お!?これはもしや…究極のDTの俺にも春が…!?

「私…もうすぐバイト終わるんだけど…そうしたら一緒にライブ見に行ってくれない?やっぱ1人で行くのは心細いんだけど…少し興味あるし…」

「う、うん!いいよ!」

「本当!?無理とかしてない?大丈夫?」

「おr…僕もバンドやりたい!ライブ気になる!」

突然のお誘いに大混乱。

「良かった!じゃあ、バイト終わったら連絡するから…電話番号もらっても大丈夫?」

「ふあ、ふあい!どうぞ!」

「ぷつ!動揺しすぎだよ!もしかして、女の子慣れてない?」

「実はその通りでございます…」

「こんな可愛い顔してるのに…なんか意外!」

え?!俺が、可愛い!?

「やばいやばい…そんなの言われるの初めてだからもうドキドキしっぱなしだ…」

「あはは!顔真っ赤!!凄く可愛いねえ!君!じゃあまた後でね!」

凄くからかわれた俺はこれ以上赤くなる顔を見せないために足早に店を出た。

早くSPACEに行きたいがとりあえず沙綾ちゃんから連絡が来るのを待つしかないので自宅待機をすることにした。

(山吹沙綾…か…)

待ってる間、あの子の名前、顔、声、匂い…

全てが蘇ってきた。

一回全てを忘れてスッキリしたので、ザッとシャワーを浴びるところにした。

シャワーを浴び終え、髪を乾かしていると着信が鳴り響いた。
さきほど貰った番号…沙綾ちゃんからだ。

初めての女の子との電話…通話ボタンを押すのも緊張…

飛び出しそうな心臓を飲み込み…ボタンを押した。

「も、もしもし…?」

「ススムくん?お待たせー!今から行くけどSPACEの場所わかるー?」

「うーんと…ちよつと、わからないかも…」

「じゃあ一回ウチに集合ね!すぐ来れる?」

「うん…すぐ行く」

「じゃあまた後でね〜!」

通話を終了し一安心…。

これから女の子と初めてののお出かけ…

そして…

バンド…ライブ…!

俺の気持ちは高ぶっていた。

物凄く楽しみで待ちきれない。

俺は走って山吹ベーカーカーへ向かった。

この先起こる出来事が

彼の人生を大きく変えることとなる…

3話 心の距離が急接近

山吹ベーカーリーに着くと、少し大人っぽい私服で待っている沙綾ちゃんがいた。

いつもバイトの制服しか見てないのでなんだか新鮮だ…

とても可愛い…

香水か何かつけてるのか、いい匂いもする。

走ってきたのもあってか、物凄くドキドキしている。

「お、きたきた！髪濡れてるけど…乾かして来なかったの？」

「う、うん…待たせちゃまずいと思って…」

「こーら、ちゃんと乾かさないと風邪ひいちゃうよ？」

「ごめんなさい…」

「別に怒ってないから〜！じゃ、さっそく行こうか？」

俺と沙綾ちゃんは目的地に向かって歩き出した。

「きよ、今日はよろしくお願いします…！」

「そんなかしこまんないですよ！本当に女子苦手なんだね？」

「なんか、ちゃんと話すの難しい…」

「じゃあ、私が手伝うから克服しよう！」

「そんな！俺…じゃなくて僕なんかのために…」

「ススム君は常連さんだし、なんか仲良くなれそうな気がするんだよね。ていうか仲良くしたい！だから克服させちゃいます！」

そんな真っ直ぐに俺を見つめないでくれ!!

キュン死にしようよ!?

「あ、また顔真っ赤にしてる〜！」

「うう…だ、だって…山吹さんがあ…」

「うーん…山吹さん…ってやめようか？なんか距離感あって寂しいよ

…。沙綾でいいよっ。」

「さ、沙綾…さん？」

「さん付けも禁止！沙綾！呼び捨て！わかった？」
ええ!?呼び捨て!?

そんなのカップルだけだと思ってたから、女子苦手な俺からしたら
難易度高すぎるよ!?

「わかったよ…沙綾」

「それでよし！これからこれでよろしくね、ススム！」

わあ…なんか本当にカップルみたいだ…

もう彼女なんていらないや…

沙綾がいてくれればそれで…

なんて思っちゃ俺がいる…

「あ、ここ！着いたよ！」

そんな会話をしているうちにSPACEに到着したみたいだ。

「なんか…小さい…」

率直な感想だった。

ライブする場所は、もつと大きい場所なんだという先入観にとらわ
れていたせいだ。

それでも、やっぱり中は気になる。

感じるんだ、何か凄い鼓動を。

上手く言葉には表せないけど、とにかく凄いものを。

中に入ろうと思えば沙綾の方を見ると、何か様子がおかしかった。

「…私…やっぱり…」

「あ、あの…沙綾…?」

「!ごめんごめん…ぼーっとしちゃって…」

「大丈夫…?なんか辛そうな表情だったけど…」

「気にしないで?ちよつと中に入るの…怖くなっちゃって…」

「え、大丈夫!?無理そうならやめておこう?」

「…うん、私は入るのやめておくね…?ここまで一緒に来たのに…な
んかごめんね?楽しんで来てね!」

こんなに辛そうな沙綾を放っておけるはずがなかった。

「ごめん…それはできない。何かあったのかわからないけど…こんなに辛そうな人を放っておいて1人だけ楽しむなんてできないよ…」
「いいのいいの！気にしないで！私ただの案内役だったってことで！」

「多分…ライブだって今日限りじゃないだし…場所だけわかったから今日はもう満足だよ？でも…せっかく仲良くしてくれた沙綾が…そんなに辛そうなの…放っておけないから…」

「ススム…もしかして、気をつかってるの？」

「そういうわけじゃ…」

「私、気をつかわれるの…好きじゃないの」

「…え？」

「また私のせいで…バンドを楽しみたい人が…」

「どうしたの…？」

「…なんでもない。ごめん、もう帰るね」

そう言うのと沙綾は俺に背を向け早足で歩いていった。

「ちよつ…えっ?!沙綾!?!」

突然の出来事に足を動かさなかった俺。

沙綾の背中が遠くなっていく。

初めてできた女友達。

これからもっともっと仲良くなれると思ったのに、こんな形で友情って崩れるの？

でも…バイト先に行けばいつでも会えるし…

またその時に軽く話せばいいのかな？

「……そんなの嫌だよっ…！」

俺は沙綾を追いかけた。

沙綾も全力で走っていたわけではないのですぐに追いついた。

「なんで追いかけてきたの?!バンドが好きなんですよ?!楽しみだったんでしょ?!私なんか放っておいて見に行けばいいじゃん!」

「…ごめん…俺、沙綾と一緒にがいいの…」

「…なんでよ…」

「わからない、わからないけど…俺、女子とこうやって仲良くなれたの初めてだったから嬉しくて…それにバンドも興味あるって知って…もつともつと、沙綾を知りたいなって思い始めてて…」

「別に…気をつかってるわけじゃないの…？」

「うん…ただ…俺がしたいようにしてるだけ…」

「…ススムには、話しておくね」

「え？いきなり何を…？」

沙綾はいきなり深刻そうな顔で話を始めた。

体調がよろしくない母親の代わりに家事を手伝っていること。

少し前、バンドをやっていたこと。

ライブ直前に母親が倒れ、メンバーに迷惑をかけたこと。

メンバーが沙綾に気をつかい、楽しく活動できてないんじゃないか不安になりバンドを抜けたこと。

でもやっぱり音楽を嫌いになれずに、今日は久々にライブを見に行こうと思ったけれど

S P A C Eの目の前に来てメンバーの顔が頭をよぎり、自分がまだ音楽に関わっていることを申し訳なく感じて入れなかったこと。

そして…また俺に気をつかわせてるんじゃないかと思いきり逃げ出してしまったということ。

沙綾は1から全て話してくれた。

まだ、知り合って間もない俺に…。

「そんな過去があったんだね…」

「私もこんなこと、ススムに話すべきではなかったよね…ごめん」

「俺は嬉しかったよ…？知り合って間もないのに、こんなに話してくれるなんて…」

「なんか…ススムは一緒にいて安心できるって言うのかな…？今日初めて話して、そんな気がしたんだ」

「そうなの？」

「うん…なんか私、危ない人に騙されてついて行っちゃうタイプかもね…（笑）」

「そ、そーだよ！気をつけなきゃダメだよ！沙綾は可愛いんだから、狙われやすいと思うよ？」

「え？私が…可愛い…？」

「しまった！思わず言ってしまった…」

「これはドン引きされたか…？」

「なんか…面と向かって言われると照れちゃうね…／／／」

「沙綾は顔を赤らめていた。」

「いや、可愛すぎか!」

「この反応…マジ天使すぎるだろ!」

「なんか…その…ごめん…／／／」

「また顔真っ赤だよ？もう私よりススムの方が可愛いんじゃないかな？（笑）」

「や、やめてよ！そんな冗談言わないで!」

「…今日は…ごめんね？」

「大丈夫だよ？沙綾とお話できて楽しかった!」

「なんか普通に話せるようになってきたんじゃない？」

「確かに…沙綾とならちゃんと話せそう!」

「また…こうやって2人で話そうね？」

「うん！これ以上外で話すのもあれだし…今日は帰ろうか！家まで送っていくよ？」

「特にやることも無くなったので俺は沙綾を家まで送ってから帰宅することにした。」

「沙綾の家まで歩いてる時も、ずっと話をしていた。」

「まだ知り合ったばかりのお互いのことを。」

「この時間が…ずっと続けばいいのに…」

「そろそろ…着いちゃうね…?」

「着いちゃう、って…帰るの嫌なの?」

「そんなわけじゃないけど…弟も妹も待つてるだろうし…」

「じゃあなんで…?」

「私だけなの?この時間、終わってほしくないって思ってるのは…」

沙綾も…同じ事を思っていてくれたなんて…

まさかの言葉に俺の胸の鼓動は、沙綾に聞こえてしまうのではないかと思うほどに大きく鳴っていた。

「お、俺も…嫌だ…けど…」

「絶対!」

「絶対?」

「絶対に!またこうして遊ぼ?絶対にだからね!」

沙綾の目には少し涙が溜まっていた。

なぜだろう…女の人は泣かせてはいけないのに

この涙を見た俺は…喜んでいた。

こんなになるまで…俺を求めていてくれるなんて…

素直に…嬉しかった。

「うん、絶対ね!」

そう言っただけで俺と沙綾は渋々お別れをした。

今日はとても楽しかった。

特に山吹沙綾、彼女との距離がかなり急接近した。

昨日まではただの店員と客だったのに…。

今では、大切な友達だ。

でも…今日は俺はそんな大切な友達に嘘をついてしまった。
別に気をつかってるわけではない。

そんなの嘘だ。

沙綾の反応が怖くて、話せてないことがたくさんあった。

だから今度は、ちゃんと話したいな。

俺は君の話を聞いて知ったから。

君にもこの事を知ってほしい。

そうしたら、もつと仲良くなれるかもしれないね。

同じ楽器なんだね。

この普通の人なら普通に言える言葉が

今の俺には

とても重い言葉だった。

4話 繋がる輪

翌朝、沙綾から1件のメッセージが届いていた。

「良かったら途中まで一緒に登校しない？」

このメッセージが5分ほど前に届いていたらしい。

嬉しくなった俺はすぐに返信をしようと文字を打っていた。

だが、寝起きでちゃんと文字が打てない…

いや、それだけではない…

沙綾とのメッセージ、変なこと言ったら嫌われちゃうかも…と凄く緊張していた。

2. 3分してやっと「いいよ！」

このたった数文字の文章を打てた。

その時、着信が来た。

沙綾からだ。

おそらく、返信が数分来なかったため起きてるかどうかの確認を込めて電話したのであろう。

俺はその出来事にビックリしてすぐに通話ボタンを押した。

「も、もしもし…？」

「あ、起きてた起きてた！メッセージ見た？」

「ごめんね！今返信しようと思ったところ！」

「いやいや、私こそ急にメッセとか電話とかごめんね？なんか…昨日のこと思い出したら…ちよつと会いたくなっちゃって…」

「今後も毎日パン屋に行くから放課後会えると思うよ！」

「まあ…そうだけど…ススムは朝から私に会いたい！とか思ってくれないの？」

「うーん…まだ寝起きだから頭そこまで回ってないかも…」

「まだ寝起きって…学校間に合うの？」

「いつもギリギリ間に合ってるよ〜?」

「ギリギリじゃダメ!余裕を持っていかなきゃ!まだ1年生でしょ!?!」

「でもお…」

「言い訳無用!じゃあ私の家で待ち合わせね!」

その言葉を残し電話は切られた。

いつもなら後少し寝てられるのに…

母親よりも面倒くさい存在に出会ってしまったかもしれない…

そう思いつつ俺はリビングへ降りた。

「あら、今日は早いんじゃない?」

「うん…友達と待ち合わせでね」

「なるほどね。朝ご飯は?」

「いらない。もう出なきゃ…待たせちゃ悪いし」

「そう…珍しくもう準備出来てるみたいだしね。気をつけて行きなさいよ?」

「うん…じゃあ行ってくる」

俺はいつもよりもかなり早めに家を出た。

今更だが

俺の通う高校が全く別の方向だったらどうしていたのだろうか。

と言う考えが頭をよぎったが

いつもパンを買う時に制服だったことを思い出した。

この辺の共学の高校は2校しかないと特定は簡単だろう。

というか、どちらの高校も同じ方向だ。

俺の通う、木村ノ秋高校。

そしてもう1つの高校、高山高校。

ブレザーと学ランなので違いがすぐにわかる。

ちなみに俺の高校はブレザーだ。

きつとその姿を見てるため、俺が木村ノ秋高校の生徒だとわかったのだろう。

そうすると沙綾は花咲川女子学園だろう…
俺の通う途中に女子高はその1校しか無い。
別の高校なら一緒に通うということができないからだ。

まあ…沙綾がそういうところ意外とバカで全然考えてなかった…
なんてこともあるか…？

なんて考えごとをしながら歩いていたら
後ろから声がした。

「今…私のことバカ…とか考えてなかった…？」

「さ、沙綾!？」

気がつくと俺は沙綾の家を過ぎていたらしい。

「…思いつきり声出てましたけど…？」

「な、何がですか…？」

「あのねえ…私もそこまでバカじゃ無いから!」

「怒ってます…？」

「どうでしょうね…。」

「ごめんなさい!!」

やばい!どうしよう!どこから聞かれてたかわからないけど、沙綾
に嫌われちゃう!!

少し涙が出てきていることに気付いた。

「ちよっ!別に泣かなくても!!」

「本当にごめんなさい!」

「もう…別に怒ってないからさ…? (笑)」

「本当…?良かったあ…」

「じゃ、学校向かおっか!」

俺と沙綾は歩き出した。

他愛もない世間話をしながら。

最初はもうちよっとな寝てたいとか、正直思ってたけど

やっぱりこの時間…幸せだ。

この幸せな時間…明日からも続かないかな?

「ね、ねえ沙綾！」

「ん？どうした？」

「明日からも！一緒に…行く？」

ダメ元でお願いしてみると

少し顔を赤くした沙綾が俺を見つめ

「そんなに私と…2人っきりの時間作りたい…？」

少しいたずらげに微笑みながら言った。

「え、ええ!? 2人つきりつて言うか…その…何と言うか…」
確かに…間違つてはいないけど…

「いいよ、明日からも一緒に行く？」

「あ、ありがとう！早起きするね！」

「うん！楽しみにしてる！そろそろ学校だね…？」

あ、そっか…やっぱり花咲川だったのか…。

でも明日からまたこの時間が来るなら…我慢だ我慢！

「そういえばこれ、ススムに持ってきたんだよ」

「何これ？沙綾の家のパン？」

「ううん、私が作ったお弁当！」

「え!?手作り？いいの？」

「うん、ススムに作ってきたんだもん。受け取ってくれない方がむしろ嫌だよ…？」

「ありがとうございます！大事に食べます！」

「そうしてくれると嬉しいな！」

なんと沙綾から手作りの弁当をもらってしまった…

やばい…なんか本当に幸せものだ！

「じゃあ、私はこっちだから。また放課後うち来てね？」

「またね〜！」

沙綾と別れ、俺も学校へと向かった。

特に学校では何事もなくお昼になった。

沙綾の弁当はとても美味しかった。

これからも…毎日作ってくれないかな…？

なんてことを考えながら完食した。

沙綾の弁当のおかげで午後の授業も乗り切り

学校は終わった。

そして最近の日課、山吹ベーカリーへと向かった。

「いらっしやい…あ、ススム！」

「沙綾！お弁当美味しかったよ！ありがとね！」

「本当？それは良かった！じゃお弁当箱は返してね？明日もそれに作るんだから」

「明日からも作ってくれるの!?!」

「え、そのつもりだけど…ダメかな？」

「全然嬉しい！楽しみにしてる！」

「じゃあ私もはりきって作らなきゃ！」

なんて会話をしていると一人のお客様が来たようだ。

「いらっしやいま…って今度はりみじやん！最近来なかったけどどうしたの〜？」

いつものチョココロネの子！

確かに久しぶりに見た気がする…

やっぱり可愛いなあ〜沙綾とは違う可愛さがある!!

「今度有咲ちゃんの家でライブやることになって…それで忙しくなつて来れなかったんだあ…」

「へえ…大変だね…ウチのチョココロネ食べて頑張れ！」

「うん！今日はたくさん買っていくね！」

「おおー！ありがと！…ってあれ？ススム？どうしてそんなに怯えてるの？」

「えっと…あの…その…」

やっぱり…中々話し慣れてない女の子が近くにいるとテンパってしまう…

「えっと…あの人…沙綾ちゃん知り合い…？」

「あ、りみは知らないんだったね…彼はススム。私の友達だよ！仲良くしてあげてね？」

「えっと…その…ススムです…よ、よろしく…お願いいたします…」

「あ、あの…わ、私は牛込りみです…その…よろしく…です…」

あ、もしかしてこの子男の人が苦手とかなのかな？

沙綾が俺と似ているって言ったことが、少しわかった気がする。